

私にとっての YMCA キャンプは 人生の OJT

佐藤 巧

Sato Takumi

元北海道 YMCA リーダー
環境省国立公園利用企画官

▼YMCA キャンプとの出会い

小学校4年生の夏休み前、父の転勤で旭川から帯広に引っ越した私は、引き続き英語を習うため、帯広YMCAの英語スクールに通うことになった。帯広YMCAは当時、転居先から自転車で通うことの出来る、程近いところにあったのがその理由である。旭川ではいわゆる「英語塾」に通っていたのであるが、帯広YMCAはアウトドアクラブ等、英語スクール以外にもさまざまな活動を行っており、ずいぶん活気のあるところだと子供ながらに感じた。帯広YMCA通い始めて間もないある日、帯広YMCAの宮崎主事（後の北海道YMCA総主事）の一言がその後の私の人生を大きく変えることになる。「夏休み、キャンプに行かないか。」キャンプのパンフレットを受け取り、家に戻ると早速、親に参加を交渉、「英語を話す機会がある」という主張が受け入れられ、快諾を得た。パンフレットには「YMCA チミケップキャンプ」と書いてあった。当時、帯広からは池田経由で池北線が北見まで通じており、自分と同じくらい大きなバックパックを背負い、北見駅に到着した私は迎えのバスに乗り、はじめてYMCA チミケップ国際キャンプ場の地を踏むことになる。



《1990年、佐藤氏が中学生時代の国際キャンプ》

そして、キャンプ場に到着し、バスから降りる私を大きな体と笑顔で迎えてくれたのは、YMCAチミケップ国際キャンプ場設立のため、アメリカのリーダー達を引き連れて来日し、今もなお「キャンプの父」として敬慕されている、故クリフ・M・ドルーリー氏であった。以来、私はドルーリー氏の言う「チミケップ・マジック（チミケップの魔術）」にかかってしまうことになる。今は亡き母によれば、帰宅した私は荷物の重さと3泊4日のキャンプの疲れで玄関にへたりこんだらしいが、「疲れたけど、楽しかった」と一言、とてもいい顔をしていらした。その後中学、高校時代はキャンパーとしてキャンプに参加し、大学時代は米国ニュージャージー州で過ごしたが、夏休みに帰国するやいなや、実家で数日過ごした後、リーダーとして毎年チミケップに向かうのであった。



《1993年OBリーダーキャンプにて》

▼YMCA でのキャンプは人生の OJT

企業研修や職業訓練の場において講義形式のトレーニングに対し、OJT（On-the-Job Training、現任訓練）という言葉がしばしば用いられるが、私にとってYMCAキャンプはその後の人生を生きてゆくための OJT であったように思う。講師はそこに集うスタッフ、リーダー、キャンパー全員で構成されるチームと自然である。

チミケップにおける中長期のキャンプではしばしば、オーバーナイトというプログラムを行っていた。キャンプ場が位置するチミケップ湖の対岸へトレッキングもしくはカヌーで移動、もしくは山の上で野営した後、翌日、もしくは翌々日、ベースであるキャンプ場に戻るというプログラムである。また、ベースキャンプから出発し、複数泊のカヌートリップで川下りをした後、キャンプ場に戻るというプログラムもあった。キャンプに行き、またそこでキャンプに行くようなプログラムであるが、阿寒～釧路川エリアを含む道東の大自然に抱かれて行う活動は野趣あふれるものであった。



《2010年カヌーリバーツーリングキャンプにて屈斜路湖の川下り》

そういったプログラムに入ると普段の生活では、見えづらくなっているものが輪郭を現す。誰かが準備をしなければ、ご飯は出てこない。チームで協働しなければ、先に進めない。カヌートリップにおいては天候と川の状況でコース変更を余儀なくされる等、「本当に必要なもの」、「いまやらなければならないこと」がはっきりと見えてくるのだ。そしてその手順を間違えると、自然が厳しく教えてくれる。また普段の「あたりまえ」が「誰かがしてくれているからこそ」に変貌する。キャンプ場に到着した時はそれぞれ知らない人たちであったキャンパー達がそのようなプログラムを通じ、一生の友となる。当然の事ながら、ベースキャンプに戻った後は、キッチンスタッフが作ってくれるキャンプ場の食事を批判する者など誰もいない。

このわずか数日間のうちに起こる、キャンパー、リーダー達の成長と結束を故ドルーリー氏は「チミケップ・マジック」と呼び、ある人はチミケップを「人づくりの聖地」と呼んだのも理解できる。

▼今後の 100 年に向けて

どの時代においてもその時代特有の不安と課題を持ちながら、人間は進化してきたように思う。そして、言い尽くされている事かもしれないが、今世紀に入ってからますます予測不可能な「不連続の変化」の時代に突入したように感ずる。自然災害や環境問題、伝染病はもとより、財政問題、軍事衝突といった問題がテクノロジーの進化により、かつてない程のスピードと広域性をともなうて、いつでも起こり得る時代となった。そのような時代において、対症的な解決策はすぐに時代遅れとなる。

一方、キャンプの「OJT」から学んだ「人間力の基礎」とも言うべきコミュニケーション能力、チームワーク、リーダーシップ、自発性、共感性、国際性、感謝といった、対人関係上のスキルは時代を問わず、色あせない。グローバル社会においてはなおさらである。また、災害時や広域停電の際はキャンプを通して学んだ、サバイバルスキルやアウトドアスキルは自分のみならず、家族や地域を守ることにもつながる。これからの 100 年を予測する事はとても難しいことではあるが、このような時代だからこそ、生きる上での「基礎的能力」を培うことの重要性を痛感すると同時に、未来に向けて YMCA キャンプの役割はますます重みを増し続けると考える次第である。

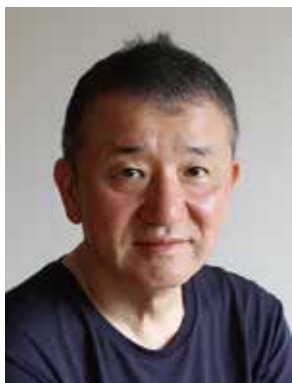
YMCA チミケップ国際キャンプ場



豊かな自然に恵まれた YMCA チミケップ国際キャンプ場は 1964 年にキャンプの父といわれるキャンプの国際的権威者 Mr. Cliff M. Drury により開設され、延べ 115,000 名の世界各国からの青少年が国際交流、国際理解、友情を深めるキャンプを実施し、トレーニングを受けたキャンプリーダーがキャンパーの生活をサポートします。

チミケップの自然は海拔 307m、エゾマツ、トドマツの針葉樹が多く、また、その森にはエゾフクロウ、ムクドリ、クマガラなどの多くの鳥類、エゾシカ、キタキツネ、エゾリスほか多くの動物も生息している自然豊かなキャンプ場です。毎年各国からたくさんのリーダーやキャンプ参加者がここに集い、貴重な経験をしています。この歴史あるキャンプ場は YMCA の職員はもとより、殆どがリーダーと呼ばれる主に大学生が中心のボランティアによって運営されています。また、ロータリークラブなど、地域のサポートも積極的に行われています。

Profile



- ・ 1962 年北海道岩見沢市生まれ。
- ・小学生からチミケップ国際キャンプに参加し、大学生時代はボランティアリーダーとして活躍、卒業後も OB リーダーとして現在もキャンプのサポートを続ける。
- ・キャンプネーム（リーダー名）は、タクミ（TAKUMI）
- ・ウィリアム・パターソン大学卒業後は外資系企業 5 社を経て、2020 年からは大雪山国立公園管理事務所国立公園利用企画官として、自然と地域と人とを結ぶ活動をしている。